

原告団

遺族・CO裁 判、災害責任 追及、特集号

第百一号

原告団レポート

遺族—— 近藤亀鶴子さん

歲月の重さ

荒尾市万田社西町二十五棟。万田山の北側の麓。一番奥まった炭鉱社長屋のその二階に、三池の遺族の一人、近藤亀鶴子(か)さん(か)が住んでいる。

仕稼工だった夫の孝允さんをあつてから、早くも十四年近くになる。

孝允さんは行年三十二歳だった。亀鶴子さんは孝允さんより一つ上だったから、そのとき三十三歳。その頃すでに小学三年生で君代さんという長女と、小学二年生で次女の末子さんという二人の子とをこいたものの、亀鶴子さんと夫婦はまだ輝くばかりの青春期を生きていた、といつてもよい。

今は、その身も四十七歳。それもそのはず、あつて小学三年生だった君代さんが二十三歳で、美容師の道歩みだっている。一般の美容師の免許は、その上の管理美容師の国家試験にも合格、資格を得た。

またあつて小学二年生だった



自宅の玄関前に立つ、遺族の近藤亀鶴子さん。亡夫—孝允さんの名前の刻まれた名札が、今も生きている。

長かった苦勞の歲月

神仏とて許すはずはない

共に生きた日々は余りにも短かく

今も挫けず

今、亀鶴子さんは近くにある三井グリーンランドのホテルの調理場で働いている。

毎日自転車での通勤。九時開業の二交代制。

一番が午前六時から午後三時まで勤務で、二番は正午から夜の九時まで。

立ち通しで働きながら、賃金は一日二千四百八十円也。月にすればは六万五千円ばかりで、それに交通費を千円も入る。

通勤のための自転車乗りも、最

輝やく日々

昭和二十八年二月四日、前後四日にわたった怒が突いて二人は種々な建築請負業の仕事に働いていて、そこで知り合ったのが、孝允さんだった。

昭和二十九年七月二十日、二人の胸のなかに、日とともに、

命の代償は

この一家に大打撃を与えた、忘れることのできないあの日。遺体安置所と化した三井鉱山の体育館を埋め、スリと並んだ白い柩のなかから、と探して来た夫——孝允さんの遺体は、どう見ても思っているように思われてならなかった。

胸を閉じられていたものの、外傷はどこにもなく、両頬にはほろりと涙が流れて、しかもふくらみとしていて、まさかこの人が死んでいるなどとは信じることができなかった。でも彼は、ついに再び帰って来たことにはなかつた。

心あらば

今、亀鶴子さんは熱心な日蓮正宗の信者である。いつとも知れず、夕べともなれば、仏の前に座って御経をあげるのが、日課の一つのようになってきた。職場で何とかがあったら御経をあげ、また何かうれいことがあったら御経をあげるという彼女。信仰仲間一人も、いつてくれたとか。

「今は七きお父さんと思つて、御本尊さんをお祀りしてゆかんね」。

兩時世尊。
安祥而起。
告舍利仏。
諸仏知照。
甚深無量。

尽きぬ恨み

今、ますます鮮明さを強めながら思い出されてくる、十年をともに住き、闘い、そして歩いてきた亡夫のこと。

——困窮愛好者だった夫。ときには妻を賞品にもったといつては、菓子器や洗剤などを持帰ったこともある。ちやうど王様口で話したのだった。あのホッピーに当たっていたその日も、「基金があるから帰りは遅くなる」と、言いついて出かけていったあの人。

——読書が好きで、よく大団記

入替えに

孝允さんが三井に入社したのは、昭和三十年二月二十八日のこと二十五歳のとき。後では仕稼工として三井の坑底で働いたが、はじめは坑外の外勤係として、すでに長女の君代さんは生まれていた。

その頃三池組は闘いに勝って停年によるなどのために退職する父兄と入れ替えに、その子弟を会

命の代償は

この一家に大打撃を与えた、忘れることのできないあの日。遺体安置所と化した三井鉱山の体育館を埋め、スリと並んだ白い柩のなかから、と探して来た夫——孝允さんの遺体は、どう見ても思っているように思われてならなかった。

胸を閉じられていたものの、外傷はどこにもなく、両頬にはほろりと涙が流れて、しかもふくらみとしていて、まさかこの人が死んでいるなどとは信じることができなかった。でも彼は、ついに再び帰って来たことにはなかつた。

心あらば

今、亀鶴子さんは熱心な日蓮正宗の信者である。いつとも知れず、夕べともなれば、仏の前に座って御経をあげるのが、日課の一つのようになってきた。職場で何とかがあったら御経をあげ、また何かうれいことがあったら御経をあげるという彼女。信仰仲間一人も、いつてくれたとか。

「今は七きお父さんと思つて、御本尊さんをお祀りしてゆかんね」。

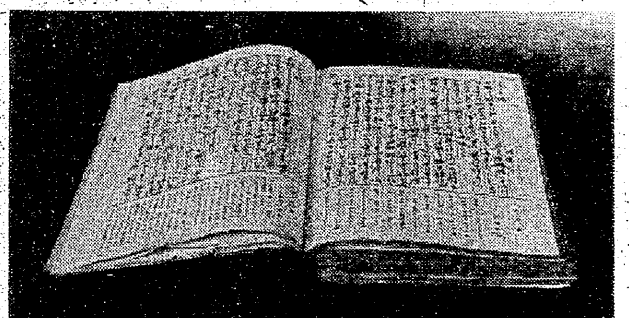
兩時世尊。
安祥而起。
告舍利仏。
諸仏知照。
甚深無量。

尽きぬ恨み

今、ますます鮮明さを強めながら思い出されてくる、十年をともに住き、闘い、そして歩いてきた亡夫のこと。

——困窮愛好者だった夫。ときには妻を賞品にもったといつては、菓子器や洗剤などを持帰ったこともある。ちやうど王様口で話したのだった。あのホッピーに当たっていたその日も、「基金があるから帰りは遅くなる」と、言いついて出かけていったあの人。

——読書が好きで、よく大団記



故人が、妻の亀鶴子さんの手もとに残した日記のうちの一冊。どのページにも、丁寧な文字でその日その日の出来ごとが、刻明に記されている。行間から、生前誠実に生きた故人の物像が浮きあがってきて、熱い思いを語りかけてくる。

いばいにしあわせな人間のよるこびがあふれていた。

そんな亀鶴子さんが、まさか結婚してからわずか十年後にはもう夫の孝允さんの命を、大災害によって引き裂かれてしまうことになるなどとは、知るよしもなかったのである。

孝允さんが三井に入社したのは、昭和三十年二月二十八日のこと二十五歳のとき。後では仕稼工として三井の坑底で働いたが、はじめは坑外の外勤係として、すでに長女の君代さんは生まれていた。

その頃三池組は闘いに勝って停年によるなどのために退職する父兄と入れ替えに、その子弟を会

孝允さんはだからこそ、あの三池闘争を「組合のおかげでこそ入替採用者の第一号となることのできた俺だ。たとえ一人になってもがんばる」と、この固い信念をもつて闘ったのだった。あのホッピーに当たっていたその日も、「基金があるから帰りは遅くなる」と、言いついて出かけていったあの人。

今、ますます鮮明さを強めながら思い出されてくる、十年をともに住き、闘い、そして歩いてきた亡夫のこと。

——困窮愛好者だった夫。ときには妻を賞品にもったといつては、菓子器や洗剤などを持帰ったこともある。ちやうど王様口で話したのだった。あのホッピーに当たっていたその日も、「基金があるから帰りは遅くなる」と、言いついて出かけていったあの人。

——読書が好きで、よく大団記

今、ますます鮮明さを強めながら思い出されてくる、十年をともに住き、闘い、そして歩いてきた亡夫のこと。

——困窮愛好者だった夫。ときには妻を賞品にもったといつては、菓子器や洗剤などを持帰ったこともある。ちやうど王様口で話したのだった。あのホッピーに当たっていたその日も、「基金があるから帰りは遅くなる」と、言いついて出かけていったあの人。

——読書が好きで、よく大団記